

【資料3】

令和元年度 第1回 県立高等学校将来構想審議会での意見

委員名	意見要旨
本図 愛実 会長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学びの質が大きく問われている中で、今回の諮問は時宜を得ている。</li> <li>・その学びの質への問いという点では大きな流れとして2点ある。1点目はOECDで言われている”Well Being”，「個人的・社会的幸福」であり、もう1点は個別最適化で、人間にとっての学びは、現在の学校制度で最適なのかというかなり刺激的な提案を学校教育制度は受けている。</li> </ul>
村上 善司 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多部制の高校があることで、居場所を見つけられている生徒もいるという実態があるので、定時制は残してほしい。</li> <li>・学び直しについては、小中学校の責任も痛感しているが、中学校において「学び残し」がなくなることは現実的に大変苦しい状況でもある。</li> <li>・「定時制」という呼び方に子供たちは抵抗があるのではないかと思う。</li> <li>・時代が目まぐるしく変化する中で、国の動向も見ながらしっかりとニーズを見定め、長期的視点で検討すべきである。</li> <li>・高校の3年間のために小中学校段階までに何をすべきかということ、中学生は理解できていない。</li> <li>・教育は人なりで、教員の資質向上にも取り組むべきである。</li> </ul>
脇坂 晴久 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理想とする「新たなタイプ学校」のイメージは、徹底した個別支援を基本として必要に応じて一斉学習と組み合わせる、自分のペースに応じて学べる学習室を学校にしたようなものである。</li> <li>・個別支援については教員による支援をベースに、ICT教材を組み合わせるなどいろいろな良いところをブレンドしていければ良い。</li> <li>・そう考える背景には3点ある。1点目は、完全なる不登校ではなく、保健室になら来られるという生徒がいる場合、別室に来られるのであればその別室を教室にできないかと考えていること。2点目は美田園高校時代に不登校経験者や中途退学者に対して、特別支援教育の専門家と宮城教育大学の学生を配置して、「学習支援室」と称してレポートの分からないところ指導する場所を用意したところ、生徒は安心して学ぶ環境が与えられたことで学習意欲が向上していく姿を見て、手応えを感じたこと。3点目は教員の指導と学び直しの動画教材を組み合わせれば、進度が違う生徒にも適切に対応していけると考えていることである。</li> </ul>

委員名	意見要旨
田端 健人 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しいタイプの学校が求められているという生徒のニーズは不登校、中途退学者の出現率からも裏付けられる。</li> <li>・日本の中でもオルタナティブと言われる、従来型の学校とは違う学びというものが多く展開されている。他県、私立学校、民間でも多様な学校のスタイルが展開されている（例：ドルトン・プラン教育やシュタイナー学校）。</li> <li>・今回の検討は県民の学校に対するイメージを新たにするものであり、従来型の学校とは違う学びに関する調査研究や、県内の定時制高校や全日制高校での取り組みからも学びながら、新しいタイプの学校や、より効果的な学びについて定時制高校も含めて検討していくべきである。</li> </ul>
高橋 知子 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭や学校生活で様々な問題を抱えている子供達には、各段階で手を掛けてあげる必要があり、そのためにはマンパワーもそのような場も必要になる。</li> <li>・社会に出れば仕事をしなければならず、その時には人と関わる力、自分で考えて行動し、答えを出す力が必要になるが、その辺がとても乏しいと感じる。</li> <li>・社会人としてもっとそのような力を付けるべきであり、学び直しは学習だけでなく、人間関係を学ぶ場ともすべきだ。</li> </ul>
鈴木 一史 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中でしっかりとした学力と学習意欲を身に付けて送り出せているかということについては、胸を張れない現状がある。</li> <li>・生徒と生徒を取り巻く環境も複雑化している中で、どのように高校を選択させるかについては大きな課題である。</li> <li>・他県の事例も見て、新たなタイプの学校に取り組んでいくことが必要だと認識を新たにしたところであり、一人でも多くの生徒が、生きて良かったと思えるような学校となればと思う。</li> <li>・学び直しは、高校までではなく生涯学習との関連で考えるべきだ。</li> </ul>
佐々木 奈緒子 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一保護者としては全日制課程で不登校または中途退学になった場合の編入制度など、一度躓いても後々引きずらないような制度が必要であると考えており、公立・私学の枠を超えた取り組みになれば良いと思う。</li> <li>・学び直しは、社会に出て働ける能力を育成すべきで、そうすることで不登校、中途退学から引きこもりにならない生徒もいるのではないかと思う。</li> </ul>

委員名	意見要旨
小林 裕介 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学び直しは本県だけでなく全国的な課題である。</li> <li>・ 価値観等が多様化している中では、全日制、定時制、通信制、それから新たなタイプの学校も含めて横並びで見て、生徒が自分に一番相応しい学校を選べるようなシステムになれば良いと思う。</li> <li>・ 中教審の特別部会にも早速、高等学校ワーキンググループを設置して、定時制、通信制の課題も含めた検討を進めるという話もあるので国の動向も見ながら検討していきたい。</li> </ul>
菊地 直子 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小林委員と同様に、いろいろな選択肢が横並びになっているということは非常に大切だと思う。</li> <li>・ 生徒が帰属意識を持ち、誇りを持てるような学校とすることが大切だ。</li> <li>・ 学び直しは、生き直しでもある。いろいろな事情で転学しなければならない場合でも生徒自身が、そこに行ったらもっと自分は良い何かを得られるんだという思えるような新しいタイプの学校となることを期待している。</li> </ul>
片瀬 弥生 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定時制や新たなタイプの学校は、生徒の実態に合った定員を設定するなど基準も考えるべきではないか。</li> <li>・ 定時制に通っている生徒は、必ずしも日中、仕事やアルバイトをしているわけではないので、多部制のように日中に勉強できる枠組みを作っておく必要がある。</li> <li>・ 保護、育成する意味では少人数も良いが、コミュニケーション能力など将来を考えると段階を踏んで状況を変えていかなければいけないと思う。</li> <li>・ 全日制と定時制の行き来を柔軟にできるような仕組みも必要ではないか。</li> <li>・ 最近の社員を見ていると失敗するのが怖いから、最初から挑戦しないという意識が強くなっているような気がしており、失敗してもそこから立ち直す経験をさせる必要がある。</li> </ul>

委員名	意見要旨
大内 栄幸 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校でも学び直しが必要な生徒がいることから、少人数指導をしている。</li> <li>・全教室にプロジェクターが配置されたので、ipadを使って動画を見せたり、本日の目的を提示するなど分かりやすい授業に努めている。</li> <li>・とりあえず普通科に進学という進路選択をする中学生が多いことは残念なところである。</li> <li>・本校の使命はしっかりと職業に就けるように送り出していくことであり、学び直しではなく学び続ける力をつけさせたいと考えている。</li> <li>・古川工業に勤めていたことがあり、生徒は資格を取ることで自信が持てて自己肯定感の醸成にもつながっていた。</li> <li>・新しいタイプの学校では、普通科の生徒が専門高校の施設・設備を使って資格取得に挑戦できるようにするなど、学校間の連携により生徒に新たな力をつけさせることも一つの方法である。</li> </ul>
伊藤 宣子 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校では、学内にカウンセリングが必要な生徒の学びの部署を立ち上げて、教科担当者を配属するとともに、ICTも活用して自学の時間も盛り込んだ。</li> <li>・学校現場で生徒にとっての「個人的・社会的幸福」を考えるとということ、生徒や保護者に寄り添いながら、生徒にとって何が一番良いのかということと一緒に考えることである。</li> <li>・様々な背景を抱える生徒は様々な専門的な知識と経験を持った人たちが支援する必要があるが、カウンセラーもソーシャルワーカーも不足していることから、その点は県も力を使ってほしい。</li> <li>・他県と同様に学校はネーミングも重要である。</li> </ul>
石川 俊樹 委員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田尻さくら高校の立ち上げの時から6年間勤務したが、同じ多部制単位制高校と言っても違いがあり、県内の定時制高校は、学校自体が多様である。</li> <li>・小学校、中学校が、全日制、学年制と同じ仕組みであり、中学生が高校を選ぶときにまず全日制、学年制を目指すのは学校とはそういうものだというイメージがあるからだと思う。</li> <li>・定時制に入学すると、従来の学校のイメージとは違ったことができるのかが試されている。</li> <li>・今回の検討は、少数派としての定時制、単位制の高校での取り組みを体系立てて整理すること、また定時制の個別支援体制や教育課程について見直しをする上で、重要な機会になる。</li> </ul>

令和元年度 第1回 県立高等学校将来構想審議会におけるキーワード

<p><u>定時制に関すること</u></p>	<p><u>両方に関すること</u></p>	<p><u>新たなタイプの学校に関すること</u></p>
<p>定時制の名称の変更</p> <p>生徒の実態に合った定員と時間帯の設定</p> <p>段階的な対人トレーニング</p> <p>全日制・学年制とは違う定時制での学び方のスタイル</p>	<p>学びの質への問い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ "Well Being" 「個人的・社会的幸福」</li> <li>・ 個別最適化</li> </ul> <p>課程に関わらず，生徒が自らに適した学校を並列で選べるシステム</p> <p>不登校・中途退学経験者がやり直せる環境づくり</p> <p>生徒が誇りを持って選択できる学校づくり</p> <p>従来の学校のイメージの転換</p>	<p>個別支援をベースに置いた一斉授業との組み合わせによる学習</p> <p>従来型の学校とは違う学びや他県・本県での取り組み事例の検証</p> <p>学校間の連携</p>
<p><u>全般的なこと</u></p> <p>高校に関する中学生の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高校で何を学ぶのか</li> <li>・ どのように高校を選ぶのか</li> </ul> <p>社会で生きていくための力</p> <p>挑戦するメンタリティ</p> <p>自己肯定感</p> <p>生涯学習としての学び直し</p> <p>教員の資質向上</p> <p>学び直しは生き直し</p>		